

# 令和4年度 学校評価

伊予市立伊予小学校

### 【評価の基準】

- A：目標を達成 (8割以上が肯定)
  - B：おおむね目標を達成 (6割以上が肯定)
  - C：あまり達成できていない (6割未満が肯定)
- ※ 各評価資料の結果をもとに総合的に判断する。

### 【評価母体数】

教職員	22
児童	379
保護者	362
地域	26

### 【評価の基準・肯定割合】

- ◎ 8割以上肯定
- 6割以上肯定
- △ 6割未満が肯定

### 【アンケートの内容】

- ア：たいへんよい
- イ：よい
- ウ：あまりよくない
- エ：よくない
- オ：わからない

【目標値】 80%が肯定 以下同様

項目	小項目 (重点目標)	評価指標	評定	考察 ● ・ 改善の方策 ◆	アンケート対象	肯定割合	アンケート結果 (%)						
							ア	イ	ウ	エ	オ		
教育課程・学習指導	確かな学力の定着と向上	家庭と協力して家庭学習の習慣(1~3年生は30分以上 4年生以上は、学年×10分以上)が身に付いている。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 家庭での学習習慣に問題を感じている保護者がいることが分かる。自主学習の内容も個人差があり、家庭学習の習慣が、まだ十分定着していない児童も多いことが分かる。</li> <li>◆ 月1回の家庭学習強調習慣での毎日の自学ノート提出率は93%になっており、それ以外の時でもできるように、児童への指導と保護者への啓発を行うことで、学習習慣の定着を図っていく。</li> </ul>	教職員	○	75	19	56	13	12		
		発達段階に応じた表現力(話す・書く)が身に付いている。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 児童が肯定的に捉えている一方で、教職員及び保護者の肯定割合が低く、児童の思いと教職員・保護者の願いとの隔りがある。</li> <li>◆ 授業の中で、話す・書く活動を今後も意識して取り入れ、定着を図っていく。教育活動全体を通して、個別最適で、協働的な学びを充実させ、聞く意識を高めているような知識を取り入れられるようにする。</li> </ul>	児童	○	76	37	39	19	5		
	心の教育の充実	道徳科の時間を中心に、自他の生命を大切に作る心やよりよく生きたいという心が育っている。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 道徳教育の重点目標に生命尊重の内容を位置付け、系統的に学びの時間を設けて実践を重ねた。また、道徳科の授業で考えを交流したり深めたりする時間を大切にすることで、自他を大切に作る心を育むことができたと考えられる。</li> <li>◆ 今後も地域や家庭と連携して自他を大切に作る心を育み、自己肯定感を養っていく。</li> </ul>	保護者	△	59	16	43	30	10	1	
		一人一人の違いを認め合い、人権を大切に作る集団づくりがなされている。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 様々な人権問題について、発達段階に応じた学習を展開していることを参観日や学年通信等で保護者に伝え、理解を得ることができた。</li> <li>◆ さらに、児童一人一人が自分や自分の集団を振り返る活動を保障し、日常生活の中で問題を解決できる行動力につなげていく。</li> </ul>	地域								
		健康教育の推進	楽しく学校生活が送れている。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教職員、児童、保護者全てにおいて肯定率が90%を超えており、楽しく学校生活を送れていることが分かる。しかし、精神的な面で保健室利用をしている児童や、別室登校をしている児童が数名いる。</li> <li>◆ 様々な環境下の子どもたちにとって学校生活が楽しいものになるように、一人一人を理解し、個々に寄り添って対応していく。</li> </ul>	教職員	◎	94	25	69	6	0	
			「早ね、(低学年は9時、中学年は9時半、高学年は10時)早おき、朝ごはん」の習慣が定着している。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 昨年度に比べ、教職員と家庭の間に認識の差があまりないことが分かる。あまりよくないと感じている割合がやや高い割合になっていることは、塾や習い事、オンラインゲームなど、様々な要因が存在していることが考えられる。</li> <li>◆ 子どもたちが自分の生活時間をマネジメントできるように個別に対応していく。また、学校だよりや保健だより等で家庭にも啓発していく。</li> </ul>	児童	◎	95	63	32	3	2	
健康教育の推進	外遊びや個に応じた体力づくり(マラソンやなわとび、アサカツなど)で健康の保持・増進に努めている。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アサカツや業間マラソン、業間なわとび等の実践を行っているため、教職員や児童の肯定的な意見が多くなっていると思われる。</li> <li>◆ 教職員・児童に比べると保護者からの評価が低めなため、学校で行っている体力づくりについて発信したり、家庭での運動を啓発できるように頑張りカードの工夫をしたりすることで、改善を図りたい。</li> </ul>	保護者	◎	89	29	60	6	1	4		
				地域									
					教職員	◎	81	37	44	19	0		
				児童	◎	80	57	23	12	8			
				保護者	○	68	30	38	25	6	1		
				地域									
学校関係者評価委員の所見	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 道徳科の授業は週1時間。各学年で系統的な学びが行われているが、その学びを家庭でも話題にあげていただきたい。</li> <li>○ 中学校の人権委員会の熱心な取組は、小学校の学びが生きているからこそ。今年度の人権・同和参観日のように、保護者の方の勉強の場をこれからも持ち続けてほしい。</li> <li>○ 学校で使っているタブレット端末の取り扱いについて家庭でも気に掛けてもらう。</li> <li>○ 運動委員会の主体的な活動が見られるアサカツが、これからも続いていくとよい。</li> </ul>			学校の対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今後も人権・同和教育の系統的な取組を続け、児童の人権尊重の実践的態度を養いたい。</li> <li>○ 今年度は、引き渡し訓練を人権・同和参観日と同日に行った。これからも保護者の方々が参加しやすい行事の在り方を模索していきたい。</li> <li>○ 学校・学年通信や個人懇談などを通じて、保護者への啓発を続けていきたい。</li> <li>○ 健康教育の取組が児童の主体的な活動になるよう、様々なバージョンを児童と共に考えたい。</li> </ul>								

項目	小項目 (重点目標)	評価指標	評定	考察●・改善の方策◆	アンケート対象	肯定割合	アンケート結果%				
							ア	イ	ウ	エ	オ
生徒指導	生徒指導の徹底	自分から気持ちのよい挨拶や返事ができる児童や正しい言葉遣いができる児童が育っている。	B	● 児童の肯定割合が高いのに対し、教職員、保護者の肯定割合が低い。マスクを着用しているため、挨拶をしたつもりになっている児童が一定数いることも一因として考えられる。 ◆ 児童会が中心となって挨拶運動を行ったり、挨拶啓発ポスターを作成したりする。また、挨拶の意味について各学級で考えることで、形式的なものにならないようにする。	教職員	◎ 69	13	56	25	6	
		いじめ・不登校の早期発見・早期解決に努めている。	B	● 保護者の肯定率が低いことから、保護者との情報共有など、連携に対して課題があることが分かる。 ◆ 子どもを中心に据え、家庭、地域、学校が連携する体制を強化する必要がある。そのために、学校生活アンケートや日頃の観察を通して、早期発見・早期対応に努める。また、電話連絡や家庭訪問を積極的に行い、保護者と情報共有を行う。	教職員	◎ 87	56	31	13	0	
特別支援教育	特別支援教育の推進	教職員の共通理解のもと、特別な支援を要する児童について、個々の指導計画が作成され、日々の支援の記録の蓄積がなされている。	A	● 特別な支援を必要とする児童について、個別の指導計画を作成し、記録を蓄積することができている。個人懇談等を活用して、保護者と話し合いの場を持ち、目標の達成状況を振り返りながら、次学期の目標を設定している。保護者と共通理解を図りながら、日々の支援にあたることができている。	教職員	◎ 100	50	50	0	0	
		校内体制を整え、関係諸機関との協力が必要な児童について、教師間や教育センター・施設・通級指導教室等と連携を図っている。	A	● 校内委員会や研修の時間を通して、児童の特性に合った支援方法等について共通理解を図り、全教職員で支援にあたる校内体制を整えることができている。通級指導教室や病院等との関係者と相談する機会を持ち、専門的立場からの助言をいただくことで、個に応じた支援や支援体制づくりに生かすことができた。	教職員	◎ 96	44	50	6	0	
研修	指導力の向上	実践力のある教師として、分かりやすく工夫した授業に努めている。	A	● 昨年と比べ、やや肯定率は増えている。コロナ禍のため、参観日の実施が少なかつた影響から、「分からない」と答えた保護者の方が12%おり、学校、教職員の発信不足は否めない。 ◆ ICTを最大限に活用し、個別最適で協働的な学びを一層充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、児童の問いを大切にし、楽しく分かる授業づくりに継続して取り組んでいく。	教職員	◎ 88	19	69	12	0	
		信頼される教師として、一人一人の児童や家庭に適切に対応している。	A	● 高い肯定率となっている。今後も学校全体の組織として、状況に応じて、一人一人の児童や家庭への適切な対応に努めていきたい。	教職員	◎ 94	38	56	6	0	
		切磋琢磨する教師として、常に学ぶ姿勢をもち、自己を向上させようとしている。	A	● タブレットの導入から2年目となり、ICTのさらなる活用に向けての研修を深め、授業づくりに生かした。また、外国語活動・外国語科の研究も3年目のまとめの年になり、児童の思いを大切にし、楽しく分かる授業を展開することができた。	教職員	◎ 81	37	44	19	0	
学校関係者 評価委員の 所見		○ こちらから挨拶をすると、児童はよく返してくれる。知っている児童なら声を掛けやすいが、不審者扱いをされるのではと思ってしまい、なかなか見守りも難しい。 ○ いじめや不登校の問題が大きくなったり、長期化したりすることがないように、早期発見、早期解決を心掛けてほしい。 ○ 保護者のアンケート結果の「分からない」の割合が多いものもある。参観日が少なかつたり、制限が掛かたりするためだろう。保護者への啓発活動を続けてほしい。		学校の対応	○ 挨拶を進んでするという気持ちや態度は、他者理解に支えられるもの。他者とコミュニケーションを取る上で大切なことである。これからも家庭と協力しつつ、友達を大切にすることもあわせて児童に指導を続けていきたい。 ○ いじめや不登校の問題は、保護者の訴えや生活アンケートからの発見もあるが、教師の見取りで把握することもある。タブレット端末を使ったり、教育相談の充実を図ったりしながら、児童の悩みを出しやすくする環境を追求していきたい。 ○ 「分からない」が少なくなるように、日々の教育活動を学校・学年通信、HPなどを通じて、積極的に発信していきたい。						

